

5 : The Untyped Lambda-Calculus

大根田裕一

oyuichi@yl.is.s.u-tokyo.ac.jp

Lambda Calculus は、1920 年代、Alonzo Church によって考えられた計算体系である。

1 Basics

Lambda Calculus では、関数適用、関数定義という概念が可能な限り単純な形で表現されている。Lambda Calculus における項 (term) は、次のように帰納的に定義される。

$$\begin{aligned} t \text{ (term)} & ::= x && \text{(variable)} \\ & | \lambda x.t && \text{(abstraction)} \\ & | t t && \text{(application)} \end{aligned}$$

Lambda Calculus における唯一の計算は、関数適用の際に起こる。

$$(\lambda x.t_1) t_2$$

のような関数適用が

$$[x \mapsto t_2]t_1$$

と書き換えることが、計算の 1 ステップである。上の項 $[x \mapsto t_2]t_1$ は、 t_1 に含まれている変数 x を全て t_2 に置き換えた項である。 $(\lambda x.t_1) t_2$ という形のした項は *redex* と呼ばれる。redex を上で述べたような

$$(\lambda x.t_1) t_2 \rightarrow [x \mapsto t_2]t_1$$

というルールで書き換えていくことを β 簡約という。従って、 β 簡約を項に対して繰り返し施していくことが Lambda Calculus における計算に他ならない。

例 1.1

$$(\lambda x. x (\lambda x.x)) (u r) \rightarrow u r (\lambda x.x)$$

一般に Lambda 項は、簡約できる箇所を複数持っている。例えば次の項。

$$(\lambda x.x) ((\lambda x.x) (\lambda z.(\lambda x.x) z))$$

複数ある redex をどのような順番で簡約していくか、に関していくつかの戦略がある。すぐ上の例を元に、それらを見てみる。(以下の例では、 $\lambda x.x$ を *id* と表すこととする)

- *full beta-reduction* : 任意の redex が任意の時に簡約できる戦略。例えば次のような簡約ができる。

$$\begin{aligned} & \text{id (id (\lambda z. id z))} \\ \rightarrow & \text{id (id (\lambda z. z))} \\ \rightarrow & \text{id (\lambda z. z)} \\ \rightarrow & \lambda z. z \end{aligned}$$

- *normal order strategy* : 最も左側 (\approx 最も外側) から順に簡約していく方法。

$$\begin{aligned} & \text{id (id (\lambda z. id z))} \\ \rightarrow & \text{id (\lambda z. id z)} \\ \rightarrow & \lambda z. \text{id z} \\ \rightarrow & \lambda z.z \end{aligned}$$

- *call by name* : normal order strategy と同様、最も左側から順に簡約していくが、Lambda 抽象の中は簡約しない。

$$\begin{aligned} & \text{id (id (\lambda z. id z))} \\ \rightarrow & \frac{\text{id (\lambda z. id z)}}{\lambda z. \text{id z}} \\ \rightarrow & \lambda z. \text{id z} \end{aligned}$$

途中までは normal order strategy と同じだが、最後の式 $\lambda z. \text{id z}$ の下線部は Lambda 抽象の中なので、簡約されない。このような簡約方法は Haskell や Algol-60 の評価方法の元となっている。(実際、Haskell は call by name よりもっと効率的な評価方法、call by need を採用している。call by need では引数が評価される時、その評価結果をどこかに記録しておく。そして以後の計算で同一の引数の評価が起こる際、再び評価を行うようなことはせずに、先ほど記録した評価結果をそのまま使う。)

- *call by value* : call by name に「引数を先に簡約してしまう」というさらなる制限を加えた戦略。ほとんどのプログラミング言語の評価方法は、この簡約戦略に基づいている。

$$\begin{aligned} & \text{id (id (\lambda z. id z))} \\ \rightarrow & \frac{\text{id (\lambda z. id z)}}{\lambda z. \text{id z}} \\ \rightarrow & \lambda z. \text{id z} \end{aligned}$$

2 Programming in the Lambda-Calculus

第1章で見たように Lambda Calculus のシンタックスは非常に単純なものであるが、通常のプログラミング言語によくある複雑なデータ構造やシンタックスと等価なものを Lambda Calculus 内で表現することが出来る。

2.1 複数の引数

複数の引数を受け取るような関数は、高階関数を利用することで実現できる。 $f = \lambda(x,y).s$ というような関数は、 $f = \lambda x. \lambda y. s$ と同じことである。このように、複数の引数を持つ関数を複数の単一引数の関数に変換することを、カリー化 (currying) という。

2.2 真偽値, and, or, not, if 分岐

まず真偽値 (true, false) を次のように定める。

$$\begin{aligned} \text{true} & := \lambda t. \lambda f. t \\ \text{false} & := \lambda t. \lambda f. f \end{aligned}$$

すると、if 分岐は次のように表すことが出来る。

$$\text{if} := \lambda l. \lambda m. \lambda n. l m n$$

一つ目の引数として、上で定義した真偽値 (true, false) を与える。2つ目3つ目の引数としてそれぞれ、 l が真のときに返す項、 m が偽のときに返す項を与える。true, false の定義により、うまく if 文の機能を果たしていることが分かる。

また、and, or, not はそれぞれ次のような Lambda 項になる。

$$\begin{aligned} \text{and} & := \lambda b. \lambda c. b c \text{ false} \\ \text{or} & := \lambda b. \lambda c. b \text{ true } c \\ \text{not} & := \lambda b. b \text{ false true} \end{aligned}$$

2.3 Pair

値のペアも (従ってリストも) 次のような関数を定義することでうまく表現できる。

$$\begin{aligned}\text{pair} &:= \lambda f. \lambda s. \lambda b. b f s \\ \text{fst} &:= \lambda p. p \text{ true} \\ \text{snd} &:= \lambda p. p \text{ false}\end{aligned}$$

関数 `pair` の仮引数 `f` は一つ目の要素に、`s` は2つ目の要素に対応している。`pair` からの値の取り出しは `fst` と `snd` によって行う。

2.4 自然数

Lambda Calculus 上では、自然数 (0, 1, 2, 3, ...) に対応するものとして、次のような Lambda 項 $c_0, c_1, c_2, c_3 \dots$ を考える。

$$\begin{aligned}c_0 &:= \lambda s. \lambda z. z \\ c_1 &:= \lambda s. \lambda z. s z \\ c_2 &:= \lambda s. \lambda z. s (s z) \\ c_3 &:= \lambda s. \lambda z. s (s (s z)) \\ &\vdots\end{aligned}$$

自然数 n は2つの引数 (s と z —”successor” と ”zero”) を受け取り、`zero` に対し `successor`—1 を足す関数—を n 回適用する関数として表現される。

`successor` は次のように定義できる。

$$\text{succ} := \lambda n. \lambda s. \lambda z. s (n s z)$$

例 2.1

$$\begin{aligned}\text{succ } c_k &= (\lambda n. \lambda s. \lambda z. s (n s z)) (\lambda s. \lambda z. \underbrace{s \cdots (s z)}_k) \\ &= \lambda s. \lambda z. s (\lambda s. \lambda z. \underbrace{s (s \cdots (s z))}_k) s z \\ &= \lambda s. \lambda z. \underbrace{s (s \cdots (s z))}_{k+1} \\ &= c_{k+1}\end{aligned}$$

足し算は次のように定義できる。

$$\text{plus} := \lambda m. \lambda n. \lambda s. \lambda z. m s (n s z)$$

例 2.2

$$\begin{aligned}\text{plus } c_m c_n &= (\lambda m. \lambda n. \lambda s. \lambda z. m s (n s z)) c_m c_n \\ &= \lambda s. \lambda z. c_m s (c_n s z) \\ &= \lambda s. \lambda z. (\lambda s. \lambda z. \underbrace{s \cdots (s z)}_m) s (\lambda s. \lambda z. \underbrace{s \cdots (s z)}_n) \\ &= \lambda s. \lambda z. \underbrace{s \cdots (s z)}_{m+n} \\ &= c_{m+n}\end{aligned}$$

かけ算は次のように定義できる。

$$\text{times} := \lambda m. \lambda n. m \text{ (plus } n) c_0$$

例 2.3

$$\begin{aligned} \text{times } c_m c_n &= c_m \text{ (plus } c_n) c_0 \\ &= (\lambda s. \lambda z. \underbrace{s \cdots (s z)}_m) \text{ (plus } c_n) c_0 \\ &= \underbrace{(\text{plus } c_n) \cdots ((\text{plus } c_n) c_0)}_m \end{aligned}$$

0かどうかの判定は次のように定義できる。

$$\text{iszero} := \lambda m. m (\lambda x. \text{false}) \text{true}$$

引き算の定義はやや複雑である。引き算を実現するためには、 $\text{pair } c_n c_{n+1}$ という形のペアを使う必要がある。 $\text{pair } c_n c_{n+1}$ に対する successor (つまり、 $\text{pair } c_n c_{n+1}$ を与えれば $\text{pair } c_{n+1} c_{n+2}$ を返す関数) として、まず

$$\text{ss} := \lambda p. \text{pair (snd } p) \text{ (plus } c_1 \text{ (snd } p))$$

を定義する。さらに今、

$$\text{zz} := \text{pair } c_0 c_0$$

とすると、 successor の反対、つまり 1 マイナスする関数は次のようにつくることが出来る。

$$\text{pred} := \lambda m. \text{fst (m ss zz)}$$

例 2.4

$$\begin{aligned} \text{pred } c_m &= \text{fst (} c_m \text{ ss zz)} \\ &= \text{fst (} \underbrace{\text{ss} \cdots (\text{ss zz})}_m \text{)} \\ &= \text{fst (pair } c_{m-1} c_m) \\ &= c_{m-1} \end{aligned}$$

pred を用いて、引き算は次のように定義できる。

$$\text{minus} := \lambda m. \lambda n. n \text{ pred } m$$

2.5 再帰関数

Lambda 項で再帰関数を定義することを考える。例として自然数の階乗を求める関数を考えよう。

$$\text{fact} := \lambda n. \text{if (iszero } n) c_0 \text{ (times } n \text{ (fact (pred } n)) \text{))}$$

fact は上の式を満たすべきなのは明らかであるが、関数 fact の Lambda 項による定義にはなっていない。右辺の fact は今まさに定義しようとしている Lambda 項だからである。

今仮に

$$g := \lambda \text{fct}. \lambda n. \text{if (iszero } n) c_0 \text{ (times } n \text{ (fct (pred } n)) \text{))}$$

という関数を考えてみる。このとき、「簡約していけば、 g に対し自分自身を適用するという形になる」 Lambda 項、つまり、

$$\hat{t} \rightarrow^* g \hat{t}$$

という形の Lambda 項 \hat{t} を g に対して適用してやれば、所望の fact が得られる。
 このような \hat{t} をどのようにして作るのか？ それには、まず次のような Lambda 抽象を考えればよい。

$$\text{fix} := \lambda f. (\lambda x. f (\lambda y. x \times y)) (\lambda x. f (\lambda y. x \times y))$$

これに g を適用してみると、

$$\begin{aligned} \text{fix } g &\rightarrow (\lambda f. (\lambda x. f (\lambda y. x \times y)) (\lambda x. f (\lambda y. x \times y))) g \\ &\rightarrow (\lambda x. g (\lambda y. x \times y)) (\lambda x. g (\lambda y. x \times y)) \\ &\rightarrow g (\lambda y. h h y) \\ &\quad (h := \lambda x. g (\lambda y. x \times y)) \\ &\rightarrow g (\lambda y. (\text{fix } g) y) \end{aligned}$$

となる。call by value の場合、 $\text{fix } g$ と $\lambda y. (\text{fix } g) y$ は等価であること¹を考えると、この $\text{fix } g$ が今求めている \hat{t} であるといえる。従って、求めるべき fact は (call by value では) 次のように書ける。

$$\text{fact} := g (\text{fix } g) = \text{fix } g$$

3 Formalities

Lambda Calculus の syntax と operational semantics を定義していく。

3.1 Syntax

Definition 3.1 (TERMS) \mathcal{V} を変数の名前の可算な集合とする。この時、 $TERMS$ の集合とは以下を満たす最小の集合 \mathcal{T} である。

1. $x \in \mathcal{V}$ ならば $x \in \mathcal{T}$
2. $t_1 \in \mathcal{T}$ かつ $x \in \mathcal{V}$ ならば、 $\lambda x. t_1 \in \mathcal{T}$
3. $t_1 \in \mathcal{T}$ かつ $t_2 \in \mathcal{T}$ ならば、 $t_1 t_2 \in \mathcal{T}$

これから先、変数の名前は一意であると仮定する (α 変換されていると仮定する)。

Definition 3.2 項 t の自由変数 ($FV(t)$ とする) は次のように定義される。

$$\begin{aligned} FV(x) &= \{x\} \\ FV(\lambda x. t_2) &= FV(t_2) - \{x\} \\ FV(t_1 t_2) &= FV(t_1) \cup FV(t_2) \end{aligned}$$

3.2 Substitution

Definition 3.3 (SUBSTITUTION)

$$\begin{aligned} [x \mapsto s]x &= s \\ [x \mapsto s]y &= y \\ [x \mapsto s](\lambda y. t_1) &= \lambda y. [x \mapsto s]t_1 \\ [x \mapsto s](t_1 t_2) &= [x \mapsto s]t_1 [x \mapsto s]t_2 \end{aligned}$$

¹ $(\text{fix } g) x = (\lambda y. (\text{fix } g) y) x$ であるということ

3.3 Operational Semantics

Definition 3.4

$$\begin{aligned} t \text{ (term)} & ::= x && \text{(variable)} \\ & | \lambda x.t && \text{(abstraction)} \\ & | t t && \text{(application)} \end{aligned}$$

Definition 3.5

$$v \text{ (value)} ::= \lambda x.t \text{ (abstraction value)}$$

Definition 3.6

$$\frac{t_1 \rightarrow t'_1}{t_1 t_2 \rightarrow t'_1 t_2} (E - APP1)$$

$$\frac{t_2 \rightarrow t'_2}{v_1 t_2 \rightarrow v_1 t'_2} (E - APP2)$$

$$(\lambda x.t_1) v_2 \rightarrow [x \mapsto v_2]t_1 (E - APPABS)$$

$E - APPABS$ ルールの左辺は、右オペランドが既に value に簡約されている application としか、マッチしない。また、 $E - APP1$ ルールは、左オペランドがまだ term である application としかマッチしない。その一方で $E - APP2$ ルールは、適用の左オペランドが value になるまでマッチしない。

以上のことは、適用 $(t_1 t_2)$ の際の評価の順番を自然に定めている。

- (1) $E - APP1$ により、項 t_1 を value に簡約。
- (2) $E - APP2$ により、項 t_2 を value に簡約。
- (3) $E - APPABS$ を使って、適用を簡約。